

中学校家庭科における家族教育の授業実践

— 家庭内における性別役割分業を考える —

A Practical Study on Family Life Education in Home Economics
at a Junior High School — With Focus on Gender Roles in Family Life

多々納 道子*・三島 香子**

Michiko TATANO, Yoshiko MISHIMA

I. はじめに

家庭生活における現代的課題の1つにジェンダーエクイティーがある。生物学的性を表現するセックスに対して、社会的・文化的につくられた性であるジェンダーという考え方の中核にあるのは、「社会におけるさまざまな役割関係・分業関係とそれにまつわる象徴体系における男女差である。」¹⁾といわれるように、固定的な性別役割から派生する問題が大きく関わっている。この固定的な性別役割分業体制は、家族員の自立や自己実現を阻害したり、人権を侵害する問題を含んでおり、男女間のエクイティーすなわち公平さを求める観点から、見直しを迫られている^{2) 3)}。これらの問題を生起させる源の1つは家庭生活にあり、課題解決には家庭内における性別役割分業を問い直す必要がある。

そこで、中学校家庭科における家庭生活領域の家族の学習で、「家庭内の性別役割分業を考える—これからの家族と家庭の仕事—」という小単元を設け、固定的な性別役割分業を見直すための授業研究を行った。学習内容や方法に関して特に留意したのは、以下の点である。生徒達は建て前としては、「男は仕事、女は家庭」という考え方を否定するものの方が多く、実際の行動は伴っていない。また、このような考え方や行動様式には男女差が著しい。したがって、固定的な考え方や行動様式を変革させるために、家族の役割分業についてロールプレイングでドラマを演じたり、生徒の保護者で主夫をしている父親を学外講師として招くなどによる授業を行い、その学習効果を検討した。

授業は、島根大学教育学部附属中学校1年の2学級で、男子20人、女子20人の計40人を対象に、1996年12月6日～18日に三島香子が実施した。なお、各学級は半学級編成になっている。

II. 生徒の実態

小単元「家庭内の性別役割分業を考える」の学習に入る前の生徒の実態を明らかにするため、事前調査を行った。調査内容は、家族構成や母親の就業状況などの家族状況、生徒の性別役割分業意識、生徒の家庭における仕事の分担状況、生徒による家庭の仕事の分担状況、家庭のしつけなどである。表1～表4に結果の一部を示す。

1 家族状況

調査結果をみると、男女合わせて拡大家族は22.5%、核家族はその約3倍の77.5%とい

* 島根大学教育学部家政教育研究室

** 島根大学教育学部附属中学校

う比率になっており、核家族が極めて大きい構成になっていた。母親は勤めているものが40.0%、勤めていないのが47.5%と勤めていない母親が若干上回っていた。

2 生徒の性別役割分業意識

まず、授業前には「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業意識に「賛成」と「どちらかといえば賛成」を合わせて賛成というのは、全体として約1/4、「反対」と「どちらかといえば反対」を合わせて反対は過半数を占めて、否定的な傾向にある。男女間では、賛成するものは大差ないが、反対するものは男子と比較して女子は約2倍を占めた。男子には「わからない」が40.0%もあり、家庭の仕事をすることやその分担の仕方に関心を持たないものが多いということを示していると考えられる。

表1 授業前の生徒の性別役割分業意識（「男は仕事、女は家庭」という考え方について）
人（%）

| | 男子 | 女子 | 全体 |
|------------|----------|----------|-----------|
| 賛成 | 1 (5.0) | 2 (10.0) | 3 (7.5) |
| どちらかといえば賛成 | 4 (20.0) | 4 (20.0) | 8 (20.0) |
| どちらかといえば反対 | 3 (15.0) | 5 (25.0) | 8 (20.0) |
| 反対 | 4 (20.0) | 8 (40.0) | 12 (30.0) |
| わからない | 8 (40.0) | 1 (5.0) | 9 (22.5) |

3 家庭の仕事の分担状況

生徒の家庭において衣生活や食生活に関する仕事は、70~90%が母や祖母といった女子が中心的な担い手となっていた。これに対して、住生活の仕事は父母や家族全員が分担するという男女共業型が半数近くを占めている。買い物、老人・幼児の世話および病人の世話については、女子中心型と男女共業型にほぼ二分された。家族の相談相手は、女子中心型よりも男女共業型が2倍以上も多く、家族員相互で相談がなされているといえる。

このように家庭の仕事は、その内容によって、女子が中心的な担い手かあるいは男女が共業してあたるのに分かれていることが明らかになった。ただし、衣生活や食生活のように毎日何らかの仕事が必要とするものは、そのほとんどを母や祖母などの女子が分担していることから、家庭の仕事は女子が分担するという生きたモデルを示すものとなることが予測できる。

表2 家庭の仕事の分担状況

| | 女子中心型 | 男女共業型 | 男子中心型 | その他 |
|-----------|-----------|-----------|---------|-----------|
| 衣生活に関すること | 35 (87.5) | 5 (12.5) | 0 | 0 |
| 食生活に関すること | 29 (72.5) | 11 (27.5) | 0 | 0 |
| 住生活に関すること | 22 (55.5) | 18 (45.0) | 0 | 3 (7.5) |
| 買い物 | 18 (45.0) | 18 (45.0) | 1 (2.5) | 3 (7.5) |
| 老人・幼児の世話 | 9 (22.5) | 9 (22.5) | 0 | 22 (55.0) |
| 病人の世話 | 15 (37.5) | 13 (32.5) | 1 (2.5) | 11 (27.5) |
| 家族の相談相手 | 10 (25.0) | 21 (52.5) | 1 (2.5) | 8 (20.0) |

4 生徒による家庭の仕事の分担状況

ここで取り上げた「洗たくもの取り込み」や「新聞取り」など7つの家庭の仕事について、「やっていない」(1点)、「言われた時だけ」(2点)、「週に2~4回」(3点)および「毎日」(4点)という4段階評定によって得点化し、生徒による家庭の仕事の分担状況を求めた。その結果、男女生徒とも総じて分担状況は低いといえる。衣生活と食生活に関わる仕事は女子の方がよく分担しており、男子との相違が顕著であった。配ぜんについては、t検定により5%水準で男女間に有意差が認められた。男子の方が女子よりもよく行っているのは、新聞取りと風呂そうじの2つであった。

表3 生徒による家庭の仕事の分担状況

(点)

| | 男 子 | 女 子 |
|-------------|------|------|
| 洗たくもの取り込み | 1.75 | 2.05 |
| 新 聞 取 り | 2.20 | 1.85 |
| 配 ぜ ん | 2.10 | 2.70 |
| 風 呂 所 う じ | 2.15 | 2.00 |
| 食 事 の し た く | 1.95 | 2.00 |
| 茶 わ ん あ ら い | 1.75 | 2.20 |
| 洗たくものたたみ | 1.60 | 2.00 |

5 今後の家庭の仕事の分担意識

家庭の仕事を「今よりももっとする方がよい」というのは、男子が50.0%、女子が60.0%と男女とも過半数を占めていた。「今の程度でよい」というのは、男女とも40.0%であった。男子には「今より減らしたい」というのが10.0%あった。4 生徒による家庭の仕事の分担状況において明らかになったように、実際には女子に比較して男子の方が分担状況は低いにも関わらず、今よりも分担したくないというものがあるということは、男子にとって家庭の仕事の分担は、それほど重要なことではないというとらえ方ではないかと考えられる。女子においては、「女は家庭」というように、家庭の仕事を分担することへの周囲からの期待を生徒自身がかなり感じとっているといえる。

6 家庭のしつけ

「家庭の手伝いよりももっと勉強しなさい」については、男女とも「たまに言われることがある」が最も多く、次いで「全然言われぬ」となっている。この勉強をしなさいについては、男子の方がよく言われている傾向にある。逆に、「もっと家庭の仕事を手伝いなさい」については、男子よりも女子のほうがよく言われていた。さらに、「女の子(男の子)だから家庭の仕事を手伝いなさい」については、男女とも半数以上のものが「全然言われぬ」としているが、言われるのはやはり女子の方が多くなっていた。これらのことから家庭においては、家庭の仕事を分担を通して、男女に固定的な性別役割分業意識がしっかりと受け継がれていく仕組みが形成されているといえる。

表4 家庭のしつけ

(1) 家庭の手伝いよりももっと勉強をしなさい

人(%)

| | 男子 | 女子 | 全体 |
|--------------|-----------|-----------|-----------|
| 全然言われない | 11 (55.5) | 9 (45.0) | 20 (50.0) |
| たまに言われることがある | 6 (30.0) | 10 (50.0) | 16 (40.0) |
| わりと言われる | 1 (5.0) | 0 | 1 (2.5) |
| とてもよく言われる | 2 (10.0) | 1 (5.0) | 3 (7.5) |

(2) もっと家庭の仕事を手伝いなさい

人(%)

| | 男子 | 女子 | 全体 |
|--------------|----------|-----------|-----------|
| 全然言われない | 8 (40.0) | 3 (15.0) | 11 (27.5) |
| たまに言われることがある | 8 (40.0) | 10 (50.0) | 18 (45.0) |
| わりと言われる | 3 (15.0) | 5 (25.0) | 8 (20.0) |
| とてもよく言われる | 1 (5.0) | 2 (10.0) | 3 (7.5) |

(3) 女の子(男の子)だから家庭の仕事を手伝いなさい

人(%)

| | 男子 | 女子 | 全体 |
|--------------|-----------|-----------|-----------|
| 全然言われない | 17 (85.0) | 13 (65.0) | 30 (75.0) |
| たまに言われることがある | 3 (15.0) | 5 (25.0) | 8 (20.0) |
| わりと言われる | 0 | 0 | 0 |
| とてもよく言われる | 0 | 2 (10.0) | 2 (5.0) |

III. 授業研究

1 単元名：家庭内の性別役割分業を考える－これからの家族と家庭の仕事－

第1次 家庭内の性別役割分業を考える 2時間

第2次 固定的な性別役割分業意識や行動の変革に向けて 2時間

計

4時間

2 目標と授業過程

第1次

目標 (1) 家庭内の性別役割分業の実態を明らかにし、家族員によって仕事の分担に偏りのあることを理解させる。

(2) 家庭の仕事は、女子が中心に担うだけでなく、男女がともにあるいは男子が中心的に行うなど、様々な分担の型があることを実証的に理解させる。

(3) 家庭内の性別役割分業に偏りのある家族を取り上げ、解決のための家族の話し合いをロールプレイングによって演じることで、家庭の仕事の望ましい分担を考えることができる。

授業過程

(1) 本時の課題を知る。

- (2) 昔話「桃太郎」と創作話「桃子姫」を比較し、感想を話し合う。
- (3) 事前調査によって明らかになった自分たちの家庭の仕事の分担の実態を知る。
- (4) 家庭の仕事の分担の仕方には、女子が中心になって担うというだけでなく、様々な型があることをマーガレット・ミードによるニューギニアの3つの種族に関する研究結果⁴⁾から理解する。
- (5) 家庭の仕事の分担の仕方に問題のある家族を例にして、解決のための話し合いをする場面のシナリオを各班ごとに考え、発表の準備をする。

家庭の仕事の分担に問題のある家族

登場人物

祖母 …………… 月曜日から金曜日の食事のしたく、掃除、洗たくを担っている。

父 …………… 会社に勤務。

母 …………… 会社に勤務。土、日曜日は休みなので家庭の仕事を行っている。

えり …………… 中学1年生。

ようすけ …………… 小学5年生。

ある日曜日の朝

祖母「みんなに相談があるんだけど…。」

母「何ですか、おばあさん。」

祖母「じつは町内で1泊2日の旅行に誘われているんだけどどうしようかと思ってね。」

父「たまには気晴らしに出かけたらいんじゃない。」

ようすけ「でも、お父さん、ぼくたちの朝ごはんや晩ごはんはどうしたらいいの。」

祖母「そうなのよ。ちょうどお母さんも仕事で忙しい時期だし、えりは中学生で女の子だから食事の準備をしてくれないかい。」

この後の家族の会話を考え、ドラマのシナリオを作りましょう。

- (6) 他の班のドラマを見て、どの様に感じたか発表する。

- (7) 次時の学習内容を知る。

第2次

目標 (1) 自称主夫をしている父親(中嶋春喜さん)の話を興味を持って聞くことが出来る。

- (2) 固定的な性別役割分業意識にとらわれない自分の考えを持ち、家庭の仕事を積極的に分担できるように実践的な態度を養う。

授業過程

- (1) 司法試験受験の勉強と両立させるため、自称主夫をしている中嶋春喜さんの一日の生活の様子をビデオで視聴する
- (2) 中嶋さんから、家族と協力しながら営む楽しい主婦人生についての話を聞き、男性からみて家庭の仕事をするのは非常に楽しく、困難ではないということを理解する。
- (3) 男あるいは女に生まれて良かったと思うか、男らしさ女らしさ、父親・母親の理想像は何かについての生徒へのアンケート調査をもとに、男女の特性、家族関係や自分たちの生き方などについて中嶋さんと話し合う。

資料 学習指導案

単元 家庭内の性別役割分業を考える ― これからの家族と家庭の仕事

目標 ○家庭の仕事の分担と性別役割意識との関連を理解することができる

○今までの家庭の仕事の分担の問題点に気づき、改善方法を考えることができる

学習計画 (全4時間)

(1) 家庭内の性別役割分業を考える …………… 2時間

(2) 固定的な性別役割分業意識や行動の変革に向けて …………… 2時間

授業の展開

| 時間 (分) | 学習内容 | 学習活動 | 学習支援 | 教具・資料・評価等 |
|-----------|---|---|---|---|
| 20 | ・昔話「桃太郎」と創作話「桃子姫」との比較 | ・「桃太郎」と「桃子姫」の話を読んで、感想を話合う | ・昔話ではおじいさん…しば刈りおばあさん…洗たくとなっていることに着目させ、その理由を考えさせる。 | ・プリント 「桃太郎」「桃子姫」 |
| 15 | ・家庭の仕事の分担の実態 | ・生徒の家庭の仕事の分担の実態を知り、男性中心型で行われている家庭が非常に少ないことに気づく | | ・事前に学級で実施したアンケート結果 |
| 15 | ・ニューギニアの3種族 | ・家庭の仕事を男性が中心に行っている種族を知り、男女の役割分業は、社会の考え方によって異なることを理解する | ・特徴のある3つの種族を紹介し、男女の役割分業は、社会の考え方によって異なることを生徒に強く意識づけたい。 | ・マーガレット・ミードの研究からアラベッシュ族ムンドグモール族チャンブル族 |
| 50 | ・ロールプレイング | ・ある家族で交わされた会話の続きを考え、ロールプレイングを演じる | ・5人ずつの4グループに分ける ・互いのグループの発表を見て、どの家族がよいと思うか話し合う活動をとり入れる | (評価) 従来の性別役割分業意識にとらわれずに家庭の仕事の分担について、自分の考えを持つことができたか。 |
| 100 | ・自称主夫をしている父親の話に興味をもって聞き、男女の特性、家族関係や自分たちの生き方などについて話し合う | ・主夫になったきっかけ ・現代の家事情 ・楽しい子育て ・主夫のメリット・デメリット 男らしさ女らしさの共通化 ・理想の父親像・母親像をきっかけとして家族関係について考える ・自分のライフスタイルを考える ・自己実現を果たすために必要な自己決定 | ・ビデオTBS「上岡龍太郎がズバリ」(8月22日放映)「ご夫婦ズベシャル」 ・朝日新聞ウィークリー AERA1991.12.17「市長が半年の育児休暇」 ・H 8. 8.10 山陰中央新報「航空自衛隊初の女性パイロット」 ・H 8. 8.15 山陰中央新報「96年度国家公務員 I 種女性合格者が過去最高239人」 ・H 4 山陰中央新報連載 主夫の子育て日記「エプロン父さん」 | |

IV. 結果および考察

1 創作話「桃子姫」と昔話「桃太郎」の比較

昔話「桃太郎」は男子が主人公で、男女の固定的な性別役割分業を示しているのに対し、おじいさんとおばあさんの役割を逆にしたり、主人公を女の子に変え、鬼退治もするという「桃子姫」という創作話を読ませ、「桃太郎」と比較・検討させた。

まず読んだ直後、生徒達は「これは変だ」、「おかしい」と口々に反応し、笑い出すものもいた。特に男子には、「桃子姫」に否定的な反応を示すものが多く見られた。しかし、教員の方から桃子姫の「どこがおかしいか」、「なぜおかしいか」などと質問し、話し合いを進めていく内に、「ぱっと聞いたらおかしかったが、よく考えればおかしくない」、「おじいさんの方が力があるような気がしたが、おばあさんがしば刈りに行ってもそんなにおかしくない」、「おじいさんは洗たくがしたいのかもしれない」などと、次第に固定的な考え方を柔軟に変化させていった。また、桃太郎のような話を小さいときからずっと聞いていると、男女にはそれぞれ決まった仕事があること、桃太郎を育てるといような仕事には女性が深く関わるというような固定的な考え方を自然に持つようになるという説明を教員から聞くと、「私には妹がいるので、これからは桃太郎より桃子姫の話をしてやりたい」という感想を述べる女子生徒がみられた。

授業後において、桃子姫の話の内容で、「おじいさんとおばあさんの役割を逆転すること」、「桃子姫（女子）が鬼退治をすること」および「桃子姫（女子）が主人公であること」は、それぞれおかしいと思うか否かについて尋ねた。結果は表5に示す通りである。

表5 桃太郎と桃子姫の比較

(1) おじいさんとおばあさんの役割を逆転すること

人 (%)

| | 男子 | 女子 | 全体 |
|------------------|-----------|-----------|-----------|
| 役割が逆になっているのはおかしい | 9 (45.5) | 1 (5.0) | 10 (25.0) |
| 役割が逆でもよい | 11 (55.0) | 19 (95.0) | 30 (75.0) |

(2) 桃子姫が鬼退治すること

人 (%)

| | 男子 | 女子 | 全体 |
|---------------|-----------|------------|-----------|
| 鬼退治をするのはおかしい | 7 (35.0) | 0 | 7 (5.0) |
| 鬼退治をするのはおもしろい | 18 (90.0) | 20 (100.0) | 33 (82.5) |

(3) 桃子姫が主人公であること

人 (%)

| | 男子 | 女子 | 全体 |
|--------------|-----------|------------|-----------|
| 主人公になるのはおかしい | 2 (10.0) | 0 | 2 (5.0) |
| 主人公になってもよい | 18 (90.0) | 20 (100.0) | 38 (95.0) |

まず、おじいさんとおばあさんの役割を逆転したことをおかしいととらえるものは、男子が半数近くを占めるのに対し、女子では極めてわずかであった。次に、桃子姫が鬼退治をすることについては、男子の約1/3のものがおかしいとしているが、女子では全くなかった。さらに、桃子姫が主人公であることをおかしいと捉える男子は極くわずか、女子では全

くなかった。女子が主人公である昔話は「桃子姫」以外にも「かぐや姫」や「うり子姫」などがあると、わざわざ調査用紙の欄外に記入した生徒が数名あった。これらの生徒はいずれも、女子が物語の主人公になるということについてはおかしくないと把えていた。

したがって、性別役割などを考える際に、実際のモデルがあるか否かが1つの判断基準になっていることが明らかであり、女子が物語の主人公になるということへの抵抗は、男女とも極めて低いということがいえる。これらの結果は、家庭や社会において「男は仕事、女は家庭」あるいは「男は仕事、女は仕事も家庭も」を示すモデルにあふれている現在、固定的な男女の役割分業を見直すには、意図的な働きかけが必要であることを示すものとなる。

今回は、まず生徒たちの「女は家庭の仕事」という固定的な考え方や行動様式を変革することを意図して、桃太郎と桃子姫という対称的なモデルを示した。このことに関しては、「桃太郎、桃子姫というように決めつけてしまうと、結局同じことになるので、どちらともが役割を考え直した方がいいと思った。」という意見が生徒から出された。したがって、さらに男女共業型のモデルを示す話を加えると、男女間の固定的な役割分業意識を見直すことを容易にしたものと考えられるので、今後の検討課題となる。

2 家庭の仕事の分担に偏りのある家族を想定した、解決のための話し合いのシナリオの例と感想

1班

えり「えー。やだな。ちょべりばって感じ。女の子だからって私に家庭の仕事を押しつけるなんてひどい。」

父 「えり。少し言葉使いを改めなさい。」

母 「そうよ。それにようすけは男の子だし何も出来ないわ。」

ようすけ「そうだよ。ねーちゃん。」

えり「なによそれ。ようすけが男だからって関係ないんじゃないの？お父さんだってもっと積極的に参加すべきよ。ねえ。おばあちゃん。」

祖母「もしかしたら、えりの言っていることは本当かもしれないねえ。ようすけやお父さんも家庭の仕事をしてみたらどうだい。」

父 「そうだな。えりばかりに押しつけてもいけないし。」

母 「私もその意見については考えないといけないと思うわ。」

ようすけ「ぼくも今まで関係ないと思っていたけど、本当はそうじゃないんだね。」

えり「そうよ。私もこの前雑誌でみたんだけど、父親が家庭の仕事をするのも変じゃないみたいだし。1泊2日の旅行、行ってもいいよ。おばあちゃん。」

祖母「本当かい、ありがとう。じゃあ、帰ってきたらまた仕事をするからね。」

えり「違うよ、おばあちゃん。おばあちゃんが帰ってきてても私たちは家庭の仕事を分担してやらなくちゃあ。それがあってこそ家族なんだよ。」

ようすけ「ねーちゃん。たまにはいいこと言うじゃん。」

母 「今日はえりに教えてもらったわね。」

祖母「じゃあ、これからはみんなで家庭の仕事ができるのか。うれしいね。」

このドラマを見た生徒の感想を記す。

- 男が家庭の仕事をするということについて考えているので、すごいと思いました。おばあさんが帰ってから仕事を手伝うということがすごいと思う。(男子)
- 今までおばあちゃんだけが家庭の仕事をしていただけ、話し合いでこれからはみんなで家庭の仕事をするようにしたのでそれがすごくよいこと。(女子)
- えりがすばらしい意見を言ったので、みんなまとまってきた。男の人がやっても(家庭の仕事)おかしくないということをお父さんやみんなに言っていた。(女子)
- すばらしい家族だと思った。一人一人がはっきりとした主張を持っている。(誰でもできる家庭の仕事)(男子)
- とてもリアルだった。先生が言われた研究結果のことを言っていてよかったし、えりが解決してよかった。(男子)

このシナリオは一つの班が作成したものである。話の筋はえりが女の子だからといってまず最初に家庭の仕事の分担を求められたことに強く反発する。家族の誰が食事を作るかという話し合いをすることによって、父親や弟もそれぞれ分担することになる。しかも、これまで母や祖母だけが分担していたことに何の疑問を持たないでいたが、えりからの提案によって祖母が旅行から帰っても、家族みんなで分担し合うことを決めるというように、固定的な性別役割分業意識から脱して、具体的な解決への手だてを示すところまで、高められていることが評価できる点である。

2班

えり「いやよ。私だって忙しいんだから。」

母「じゃあなたは……………」。

父「あ……………だめだめ。」

母「そーね。やっぱりえりがやってくんなきゃね。」

えり「えーそんなあー。納得できないわよ。おばあちゃんが家庭の仕事をやんなきゃいけないのに、なんで中学生の私がやんなきゃなんないのよ。」

えり「えり！あんた女の子でしょお！少しは家の仕事も手伝いなさい。！」

祖母「じゃーやっぱり旅行やめようかねー。」

ようすけ「え、そんなあー、そんなあー。旅行いってくんなきゃおみやげないじゃん。」

父「おまえ！おみやげ目当てだったのか！」

えり「んー、じゃあ私ひろちゃんの家にとまりにいくわ。」

ようすけ「えー、じゃあぼくは、しゅん君ちにとまりにいくよ。」

母「そんな、向こうの家に迷惑かけるでしょ。」

えり「う……………ん、も……………。じゃあ、私がするわ。すればいいんでしょ。ただし、あんたも手伝うこと。」

ようすけ「ガーン。なんで。」

父「ということなんで、お母さん行ってきて下さい。」

祖母「悪いわね、じゃあえりちゃん、ようすけくんよろしくね。」

このドラマについての感想を記す。

- やっぱり、1人でやることは大変だから、みんなで協力してやるのが大切だと思った。
(男子)
- 1人1人が協力してやらないと、家庭のしごとが成り立たないということが分かった。やらなければならないことをいやいやでもやる。(男子)
- 話がすごく現実的でよかった。他の家に泊まりに行くという反抗も良かった。父が反対するには、ちょっとびっくりした。(女子)
- おばあさんのことをちゃんと考えていいと思いました。いやいやでもちゃんと考えていたのでもいいと思いました。(女子)
- おばあさんが旅行に行けたところは良かったけれど、みんなが納得していなかったのも、その点をもう少し考えると良かった。(女子)
- 家族は協力するものだということがよくわかった。チームワークがよかった。(女子)

この2班は、家族の話合いにおいてなかなか意見がまとまらず、えりに押しつけることになった。えりは、しぶしぶ引き受けるが、自分一人だけでなく弟のようすけも一緒に分担することを強要する。最後は父親の判断で、えりとようすけの2人で家庭の仕事を分担することが決定された。この父親の判断による決定には、感想にもあるように、みんなが納得するまで考えた方がよかったと批判的な判断を下している。

今回作成されたすべての班のシナリオは、性別役割分業をめぐって最初は、だれが分担するかで葛藤があり紆余曲折があるものの、最終的には子どもが二人で分担するかあるいは家族みんなで協力して分担するというように、これまでの女子中心という男女分業型から男女が共にという男女共業型へと移行するものであった。上記のような感想からみて、男女共業意識を持つことにおいて、その基盤となる考え方である家庭の仕事は、必ずしも女子がしなければならないことはないということを理解させるにおいて、創作話「桃子姫」やマーガレット・ミードの研究結果の提示などが有効に作用したといえる。

3 中嶋春喜さんの話を聞いての感想

- 主夫と言われた時は、はっきり言ってあまりいいイメージを持ってませんでした。しかし、それはこれまでの固定観念にとらわれていたせいで、やはり男女が協力し、やるべきだと思った。(男子)
- 最初は何か変なかんじだなと思っていたけど、中嶋さんのお話を聞いて、はっきり言ってそうだなーと思いました。ぼくの家ではほとんどの家庭の仕事は母がやっています。中嶋さんの話を聞いて、もうちょっとぼくたちも手伝おうかなと思いました。中嶋さんが言っていた「家事をするのがおもしろくてたまらない」という言葉が、ぼくの家でもそうなるようにしたいです。(男子)
- 自分の人生にほこりを持っているので素晴らしいと感じました。ぼくは即実行することは出来ないで、主夫になるかわからない。でも性別の差別はなくなるといいと思う。(男子)
- 男だから、女だからということにとらわれず、しっかりと自分のやりたいことを1度きりの人生の中でやろうとしていて尊敬する。(男子)
- やっぱり家庭で決めること。それに主夫が今少ないから、みんなはずかしがっているが、もっ

と増えればふつうになると思う。(男子)

- 変わっていていいんじゃないですか。そういうのは、人の勝手だから。(男子)
- 「男は仕事、女は家庭」という考え方にしぼられず、自分のやりたいことをやっている中嶋さんはえらいと思いました。
- 私は「男は仕事、女は家庭」という考え方は反対ですが、中嶋さんが主夫をやっていることにびっくりしました。でも中嶋さんの話をきいていると別に変じゃないし、やっぱり「男は仕事、女は家庭」という考え方はおかしいと改めて思いました。中嶋さんが主夫をやっていると聞いてびっくりしたのは、やっぱり「男は仕事、女は家庭」という考え方があったからだと思います。(女子)
- 中嶋さんは家庭の仕事を楽しんでおられる方だと思いました。中嶋さんの話を聞くまでは、男の人が家事をするなんておかしいと思っていたけど、本当はそんなことは間違っていました。ビデオで見えていたけど料理なんか、とてもうまそうでした。さ・し・す・せ・そのことも教えてもらったし、私のお母さん以上にいろんなことを知っているんだなと思いました。(女子)
- とても立派な人だと思いました。私の家は母が家事をやっているので感心しました。中嶋さんには、これからも続けて頑張ってもらいたいと思います。男も女も関係ないということを改めて考えさせられました。(女子)
- 男の人が家事をやるのは少し変だと思いましたが、中嶋さんの話を聞いて、それと逆に別にいいのではないかと思いました。それに家事が大変なのは知っていましたが、やってみると意外に楽しそうだと納得しました。これから、少しずつ家事の手伝いができるといいです。(女子)
- 主夫をやるのっていいと思います。ちょっとしたことで主夫になるきっかけができたことは、よかったですね。ふつう主婦とかする人っていやいややっているんだけど、中嶋さんは楽しんでやっておられるので見習いたいです。楽しく感じられるのってすごくいいことだと思います。これからの家庭にどんどんそういうふうな主夫をやる人が増えるといいと思いました。もちろん、それぞれの家庭によってさまざまな決め方があるけど、男は仕事、女は家庭にとらわれず、男も女も平等で、明るい社会ができるとうれしいです。わたしも親のしごとをもう少し手伝いたいと思います。(女子)

これらの感想からわかるように、男性（父親）が主夫をしているということについて、直接話を聞くまではやはり変だとかおかしいとかなどあまりよいイメージを持たなかったというのが男女ともほとんどであった。しかし、中嶋さんの話しを聞いたり、一日の生活の様子をビデオで見たりして、その考え方が変わったとか自分も家庭の仕事をもっと手伝いたいというように、肯定的な感想を述べたのは、女子全員と男子は20人中17人にもなった。したがって、大部分のものが男性（父親）が主夫をしているということからもたらされたマイナスのイメージを、直接話を聞くことによってプラスに変え、さらにそのことが男女の固定的な性別役割分業をとらえ直すことにつながったものと考えられる。

今回は中嶋春喜さんを生徒達に主夫として紹介した。主婦に対置して主夫としたのではなく、中嶋さん本人の説明を借りれば、「司法試験受験のための勉強と家庭の仕事を両立しており、

他に自分のことを表現しようがないので、主夫と名乗っている。」のである。また、授業においても、「自分の家庭では妻の仕事の関係で、午前中は妻が家庭の仕事をやり、午後からは自分が担当している。娘達も分担する。」というように、家族で協力している家庭であることを説明してもらった。しかし、中嶋さんを主夫として紹介したため、生徒達の感想からみる限り、主婦と対置した主夫として理解したものが多かったように思われる。したがって、中嶋さんは男女共業型で家庭の仕事を分担しているということを、本授業においてもっと強調する必要があるものと考えられる。この点も、今後の検討課題となる。

4 性別役割分業意識の変革

授業前に男は仕事、女は家庭という考え方に、賛成するのは男女とも25.0%と等しく、反対するのは男子35.0%、女子は70.0%と男女差が著しいということから、一連の授業の後には、このような考え方には女子は全員が反対で、男子では「賛成」が20.0%、反対が60.0%というように固定的な考え方を大きく変革させた。したがって、家族学習において家庭内の性別役割分業について取り上げたことは、生徒達の固定的な考え方を見直し、変革させる契機になったと考えられる。

表6 授業後の性別役割分業意識

| | 人 (%) | | |
|------------|----------|-----------|-----------|
| | 男子 | 女子 | 全体 |
| 賛成 | 1 (5.0) | 0 | 1 (2.5) |
| どちらかといえば賛成 | 3 (15.0) | 0 | 3 (7.5) |
| どちらかといえば反対 | 7 (35.0) | 6 (30.0) | 13 (32.5) |
| 反対 | 5 (22.5) | 14 (70.0) | 19 (30.0) |
| わからない | 4 (20.0) | 0 | 9 (22.5) |

5 学習意欲

学習意欲については、1) 学習題材への興味、2) 学習内容の理解および3) 学習仲間への所属性の3つの観点から調査した⁵⁾。

学習題材への興味および学習内容の理解に関して、「学習したことは楽しかったですか」や「よくわかりましたか」についての項目は、男女とも「はい」と答えたものの方が圧倒的に多く、学習意欲の高かったことを示すものであった。このように意欲的に取り組んだのは、今回のロールプレイングによるドラマを演じることで主体的な取り組みがなされたこと、学外講師による授業が男性の新しいライフスタイルを示すとともに、生徒との話し合いのもとに進められるという、これも生徒の主体性を重視する授業形態であったことによるものと考えられる。ただ、女子と比較して男子においては、今後の学習意欲を示すものは60.0%にとどまっているので、さらに内容面での工夫が必要である。

学習仲間への所属性という点に関して、「クラスの友達に役立つように努力しましたか」に「はい」と答えたものは、特に女子の割合は極めて低かった。この設問にはこれまでの調査においても、「はい」と答えるものはいずれも低くなっており^{6) 7)}、自分がやったことについては低い評価をするという、傾向を示したものと思われる。これに対して、「他の人の発表や活動が、あなたの役に立った」というのは、男女とも高率であった。

表7 学習意欲（はいと答えた割合）

（％）

| 項 目 | 男子 | 女子 | 全体 |
|---|--------------|--------------|--------------|
| 1) ・いつもに比べて、これからの家庭と家族の仕事について学習したことは楽しかったですか。 ・これからの家族と家庭の仕事のような学習をもっとやりたいですか。 | 90.0 | 90.0 | 90.0 |
| 2) ・いつもに比べて、これからの家庭と家族の仕事について学習したことは、よくわかりましたか。 | 95.0 | 100.0 | 97.5 |
| 3) ・授業中のあなたの発表や活動が、クラスの友達役に立つよう努力しましたか。 ・授業中の他の人の発表や活動が、あなたの役に立ったと思いますか。 | 75.0 85.0 | 15.0 90.0 | 45.0 87.5 |

したがって、今回の小單元における生徒の学習意欲はかなり高く、学習内容や方法は意欲を高めるにおいて有効であったことが実証された。

6 今後の家庭の仕事の分担意欲

授業後における生徒自身による今後の家庭の仕事の分担意欲を明らかにした。その結果、男子では「今よりもっとする方がよい」というものが5%増加し、女子では反対に5%減少した程度の変化があったに過ぎなかった。中学生という段階では、行動様式の変化につながる家庭の仕事の分担意欲を変化させることは、困難なことかもしれない。今後さらに、学習内容や方法に検討を加え、授業実践し、学習効果を検証する必要がある。

V. まとめ

家庭生活における性別役割分業を見直すために「家庭内における性別役割分業を考える」という小單元を設け、ロールプレイングを取り入れてドラマを演じたり、学外講師による授業を行ったところ、男女生徒とも意欲的に取り組み、「男は仕事、女は家庭」という固定的な性別役割分業意識を変革することに学習効果が認められた。

参 考 文 献

- 1) 藤田英典 教育における性差とジェンダー 東京大学公開講座性差と文化 東京大学出版会 (1996) p256
- 2) 上野千鶴子 差異の政治学 上野千鶴子他編著 岩波講座現代社会学第11巻ジェンダーの社会学 (1996) p1
- 3) 池田秀男 婦人問題－問題の所在と解決の方向 池田秀男編著 婦人問題学習ハンドブック ぎょうせい (1984) p11
- 4) マーガレット・ミード著、田中寿美子・加藤秀俊訳、移りゆく世界における両性の研究男と女上、東京創元社、(1986) pp.74～77,
- 5) 片岡徳雄、小集団による授業改造、黎明書房、(1973) pp.23～27
- 6) 多々納道子、久我俊子 家族・家庭生活にかかわる領域の教材開発と授業研究 日本家庭科教育学会 中国地区会共同研究報告書、(1990) p.44

- 7) 多々納道子, 久我俊子, 西野祥子, 三島香子 「中学校家庭科における環境教育の授業実践 — 家庭生活との地域の環境 —」 島根大学教育学部紀要第29巻 (教育科学編), (1995) p.53